

# 学校田園寮について

小 峰 総 一 郎

## 〈目 次〉

はじめに

1. 学校田園寮の成立
2. ドイツにおける学校田園寮の展開
  - (1) 全ドイツ学校田園寮連盟
  - (2) 学校田園寮の運営形態
3. ベルリン新教育と学校田園寮
  - 一、中等学校の学校田園寮
  - 二、市立学校田園寮の建設
    - (1) 前史——青少年局によるショイエン学校田園寮等
    - (2) ツォッセン学校田園寮（市立第一学校田園寮）
    - (3) ツェルペンシュロイゼ学校田園寮（小規模な学校田園寮）
    - (4) ヘルムスドルフのペスタロッチ学校田園寮（市立第二学校田園寮）
    - (5) ビルケンヴェルダー学校田園寮（市立第三学校田園寮）——建設中

ま と め



写真 1. ゾースト高等実科学学校の学校田園寮

## はじめに

ドイツの教育に「学校田園寮」(Schullandheim) と呼ばれるユニークな校外施設がある。これは、かつてわが国にあった「林間学校」を思い浮かべるとややそれに近いものではある。しかし、わが国の林間学校とドイツの学校田園寮との根本的な違いは、学校田園寮が各学校のないし市立の恒常的な施設であり、逗留は夏だけではなしに一年のいずれの時期にも行なわれるのだということ、さらに田園滞在は学習の一環であり、学校田園寮は実地学習のベース拠点であるということ、また、その目的は自然に親しむこと自体の追求、こころと体の解放、また、宿泊生活を共にしながらの自治や協同性の育成を目的とするものであること、等である。このような意味で、ドイツの学校田園寮はいわば「拡大された学校」なのである。

ヘールマンの『教育学辞典』での「学校田園寮」についての説明は次のようである。

「学校田園寮 (Schullandheim) —— 主として都市の学校の有する田園宿舎で、一ないし数学級が一年の一定期間田園逗留できるようにしたもの。逗留はふつう最低 6 日、最大 14 日である。

学校田園寮滞在中、授業は一般にごく限られた形で継続される。学校田園寮は、学校の訓育活動と子どもの身体・健康促進にとって重要な役割を果たす。同時に、田園と結合することにより都市と農村の対立を克服し、その地域の諸関係にふさわしい総合学習を展開することができる。科目別授業は大部分がグループ研究に取って代われ、授業と訓育とは互いに結合されるのである。

『学校独自寮』はその学校の父母によって維持され、『学校共同寮』は公益団体、地方自治体、学校協会で維持される。

ドイツ連邦共和国の学校田園寮 (約 150 寮が小学校用、約 60 寮が中等学校用) は、『ドイツ学校田園寮連盟 (Verband deutscher Schullandheim)』に統合されている」<sup>(1)</sup>。

学校田園寮は、今世紀初頭の青年運動や田園教育舎（Landerziehungsheim）運動と同様に、都市化や都市文明への批判の中から自然・田園への憧れ、また、自然と人間性との結びつきを目指したところに発祥起源をもっている。そしてこれが新時代の人間形成の重要な場となって、ベルリン新教育に豊かな土台を提供したのだった。しかし、それがナチ時代になると、学校田園寮は身体的人格性を重視したナチ教育学のゆえにむしろ「積極的に」意義づけされた<sup>(2)</sup>。そして今日、学校田園寮は、かつての狭隘な身体性や共同性崇拜を越えて、人間が自然と深く共生する人間教育の場としてドイツ教育できわめてユニークな制度となって定着しているのである<sup>(3)</sup>。

ワイマール時代のベルリンにおいては、経済的困難の中にありながら、学校田園寮の建設、拡大が市行政当局の積極的姿勢の下に進められた。それは、身体や健康を含めて児童生徒の全体的な発達をはかろうとする新教育の時代的必然性が人々に理解され、行政もまた積極的にこれに応えたからだと言えるだろう。

そこで本論では、このワイマール時代ベルリン（州と同格）における学校田園寮の設置、展開について考察したいと思う<sup>(4)</sup>。

## 1. 学校田園寮の成立

ヴォルフガング・シャイベは『ドイツの新教育運動』（1969年初版）の中で学校田園寮の成立と展開について次のように述べている。

「20世紀初頭以来ドイツ全土で成立しつつある学校田園寮は、教育運動の一つの成果である。学校田園寮——それはつまり寮（Heim）なのだが——は、田舎の適切な地点に設置された、都市の一枚ないし数校の所有になるもので、教師指導下のクラス集団が数日あるいは数週間ここに移転（verlegen）するというものである。」<sup>(5)</sup>

そして、シャイベは、1925年10月にベルリン中央教育研究所で行なわれた「学校田園寮」会議でのフランツ・ヒルカー講演も引きながら、学校

田園寮の全ドイツにおける発展を述べている。それによると次のようである。

1925年：

現存の学校田園寮：120寮

うち、大小の集合寮：20寮超

独立寮：約100寮

さらに15都市62を下らぬ数の国民学校・中等学校が建設を検討中。

1926年：

学校田園寮の全国組織「全ドイツ学校田園寮連盟（登録協会）」

(Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V.) 結成

1932年：

学校田園寮：250寮以上<sup>(6)</sup>

伏見猛彌は、学校田園寮は1919年に初めて設けられたのだが、それはわずか5寮にすぎなかった、しかしやがて急激に増加して1929年には270寮を越すに至ったとし、その分布はハンブルク(37寮)、ザクセン(31寮)の各地方、つまり北ドイツに多く、南ドイツ、西ドイツには少ないとしている。また、学校種としては、中等学校のものを中心だが、小学校、中間学校、職業学校のものも多少は認められ、中でも特にハンブルクのは、37寮中24寮が小学校寮であったと述べている<sup>(7)</sup>。

ベルリン新教育で名高い「シャルフェンベルク島学校農園」(Schulfarm Insel Scharfenberg, ヴィルヘルム・ブルーメ校長)の母胎であるベルリン北部、フンボルト・ギムナジウムの「学校共同体寮」がまさにこの学校田園寮なのであり、また、ベルリン南部、ノイケルンの著名な新教育実験学校「カイザー・フリードリヒ実科ギムナジウム」(フリッツ・カルゼン校長)が度々利用した「ツォッセン若者村」は、ベルリン市が共同利用を目的として設立した学校田園寮なのであった。伏見は、ハンブルクの小学校用の学校田園寮に注目しているが、これは、そもそもハンブルクの初等協同体学校運動が青年運動を一つの源としていて、「協同体生活」

を意義豊かなものにするために積極的に学校田園寮（学校寮 Schulheim）活動に取り組んだという事情がある。たとえば、ハンブルク郊外「アーレンスブルク街学校」（「ドゥルスベルクの学校」）の建設、運営に携わったユリウス・ゲープハルトは、「学校寮」での生活は真の閑暇であって、そこで各人は自分の体験を味わい尽くすのである、田園の風景や人々に親しみをを感じるこの学校寮での体験は、旅行などよりもはるかに印象深いものであり、連帯心の育成にとっても大きな役割を果たすのである、と述べていた<sup>(8)</sup>。

ハンノ・シュミットも、1919年にはわずか20寮にすぎなかった学校田園寮が、1933年には255寮とめざましく増大している、それには、経済的な支援が行なわれたことはもちろんであるが、驚くべきは、学校田園寮の担い手が普通は学校ではなく親達であったことである、と述べている<sup>(9)</sup>。

識者によって学校田園寮の数は若干異なるが、ともかく、学校田園寮はヴィネケンの「生徒自治令」（1918年11月27日）を直接の起点として作られていったものであること、その翌年約20校ほどであった学校田園寮が、10年間で10倍の200校程度にまで増大しているという事実は確認できるのである。これはたしかに大きな事実である。これには、学校田園寮が時代の要求や必然性に適っていたということが言えるであろう。

学校田園寮が成立する契機を、シャイベは、①都市批判、文明批判 ②青年運動の自然崇拜と散策スタイル ③郷土運動 ④生活協同体に基く協同体運動のような新教育運動、に求めている<sup>(10)</sup>。新教育を社会史的に見るならば、この時代の人口の都市集中、産業化と家庭の教育機能の解体、失業と経済的逼迫が、たとえば「菜園学校」や「生産学校」、さらには「生活協同体学校」のような新しい人間形成の社会的制度を生み出したということが出来るのであるが、これの背後には、シャイベが言うように、都市文化や都市文明そのものへの批判、ないし懐疑といったものが大きく横たわっているのである<sup>(11)</sup>。そして、それらへの対抗として、中には「原初の」田園生活ないし閉じられた生活空間の中に「学校共同体」を設立する企てが生じたりもしているが（たとえば、ブレーメン郊外バルケンホフに、青年芸術家ハインリヒ・フォーゲラー（Vogeler, Heinrich ? ～

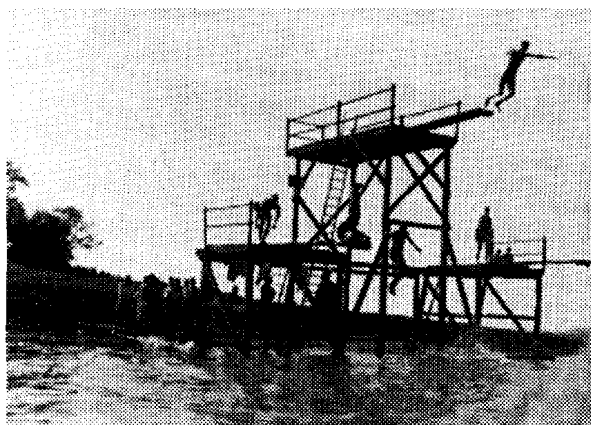
1942) の建てた革命的な「労働学校」など<sup>(12)</sup>), そうではなくて, これらを現代文明から孤立させず, 現代社会と結びながら自然と人間との新たな関係を構築し, 人間の生をより豊かなものにして行こうとする取り組みが「田園教育舎」運動, ならびに「学校田園寮」運動であると言えるだろう。実際, ベルリン新教育の担い手の多くが「田園教育舎」を経由して来た人物であり, 彼らは, 学校生活に近代が失った〈自然〉と〈協同体〉という原理を再発見させたのだった。この「田園教育舎」の教育的意義について, 「ベルリン中央教育研究所」や「徹底的学校改革者同盟」は大いに注目し, その内容を会議でも熱心に取り上げているのである<sup>(13)</sup>。



旗の掲揚



湖岸にて



飛び込み台で



談話室の夕べ

写真2. ソースト高等実科学学校の学校田園寮 (メーネゼー)



数学の戸外授業



ドイツ語の戸外授業

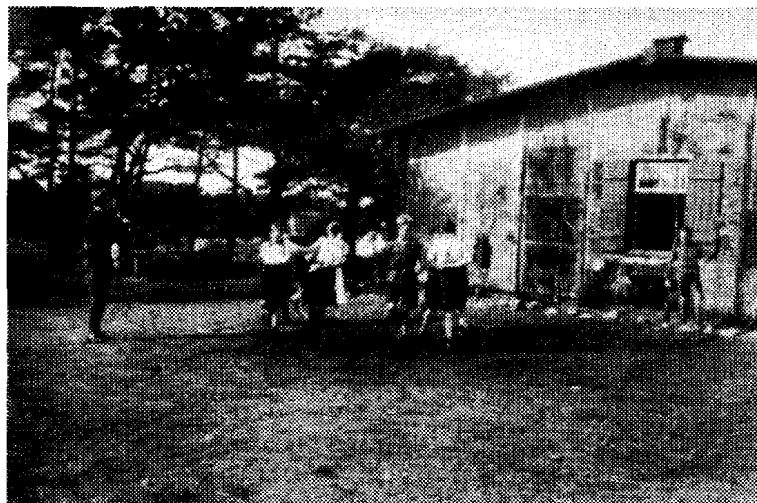


写真 3. ハンブルク・テレマン街国民学校の学校田園寮 (ハンブルク)



## 2. ドイツにおける学校田園寮の展開

### (1) 全ドイツ学校田園寮連盟

さて、以上のような意義をもつ学校田園寮は実際にどのように運営、展開されたのであろうか。

それを知る手がかりになるのが、1926年に結成された学校田園寮の全国組織「全ドイツ学校田園寮連盟（登録協会）」（Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V.）が編んだ、同連盟加盟の学校田園寮の一覧紹介書『全ドイツ学校田園寮連盟（登録協会）：イラスト入りハンドブック』（1930年）である（Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. Illustriertes Handbuch. Kiel: Kunstdruck- und Verlagsbüro Kiel, 1930）。ここには各校の学校田園寮が、歴史や写真、経費内訳などを添えて各校思い思いのやり方で紹介しており、ここから学校田園寮の日常生活や運営の実際を知ることが出来る。

本書に報告を寄稿しているのは次の185の学校田園寮・団体である。これが、おおよそ1930年の時点における「全ドイツ学校田園寮連盟」の到達点だということができるであろう。それを邦・州ごとに整理してみたのが次表である<sup>(14)</sup>。

本書冒頭で、連盟理事長R・ニコライ（ブフホルツ市）が学校田園寮について大要次のように述べている。

学校田園寮は、森林地帯や山岳、あるいは海浜で貴重な体験が出来るようにその場所も選りすぐられている。ここでクラス仲間の子どもたちは、大都市から離れ、ふつう数週間教師とともに生活するのである。そこには、体操やマラソンもあれば授業もある、お昼を食べてその後はお休み。また、作業やスポーツ、水泳、散策もある。夕食の後は楽しい歌の夕べや演劇、朗読会、また、お話の集いも行なわれる。子どもたちはここでの一日を終えるとくたくたになってベッドに駆け

込むのである。

…この学校田園寮の教育的影響力は計り知れないほど大きい。彼らはここで初めて大きな協同体を作るのである。各人はこの協同体の下で自らを統御するのだ。また、彼らが教師とともに生活して、人格の教育がなされ、かつ、自主的に判断する力が養われるのである。自然

表 1. 『全ドイツ学校田園寮連盟（登録協会）：イラスト入りハンドブック』  
寄稿の学校田園寮数（1930 年）

番 号	邦・州 名	学校田園寮数
	(プロイセン邦)	90
1	オストプロイセン州	2
2	グレンツマルク州ポーゼン・西プロイセン	1
3	ポンメルン州	3
4	ブランデンブルク州	2
5	大ベルリン市	15
6	上シュレジエン州	1
7	下シュレジエン州	7
8	シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州	8
9	ハノーヴァー州	14
10	ザクセン州	9
11	ヘッセン・ナッサウ州	8
12	ライン州・ヴェストファーレン州	20
13	(バイエルン邦)	2
14	(ヴュルテンベルク)	1
15	(ザクセン邦)	34
16	(バーデン邦)	6
17	(テューリンゲン邦)	1
18	(ヘッセン邦)	2
19	(オルデンブルク邦)	1
20	(ブラウンシュヴァイク邦)	4
21	(自由ハンザ同盟都市ハンプルク)	38
22	ドイツ・オーストリア	6
合 計		185

と共同生活は互いに響き合い、すべてが都市の中の学校よりもはるかに容易にかつ成功裡に展開されることであろう。

…学校田園寮はまだ若い。1919年に20寮だったものが1929年に200以上になった。ハンブルク、ザクセンで運動が強固であり、ベルリン、ブレスラウ、ハノーヴァー、ライン・ヴェストファーレンがこれに続く。1926年にハンブルクでは90校、9000人以上の生徒が学校田園寮を体験した。その体験日数は合計170,000日になる。

…学校田園寮の担い手は学校ではなくて親である。彼らが組合を作って、家庭と学校の橋渡しの共働を、すばらしい形で実現しているのである。ここには、教師と親の自由意志での犠牲的精神が強く表現されている。1000名以上受け入れる寮もあれば30席しかない寮もある。国立の新築寮もあれば劣悪な田舎家もある。だが、必要な衛生環境は満たされている。ここに1～4週間滞在して経費は1～3.5RMである。これも父母、教師の協力のお陰である。

…この端緒についたばかりの学校田園寮の運動は、多くの困難に遭遇しているが、現代の力強い意志に支えられて、青年の内からの新生と、国民の新生とをもたらすことであろう…<sup>(15)</sup>。

見られるように連盟理事長ニコライは、学校田園寮がどのように発展したか、それはまたどのように運営され、また、維持されるのか、実態はどうか、その意義、また困難点は何かを率直に語っており、これによって我々は学校田園寮がいかなるものであるのかを大略知ることが出来る。

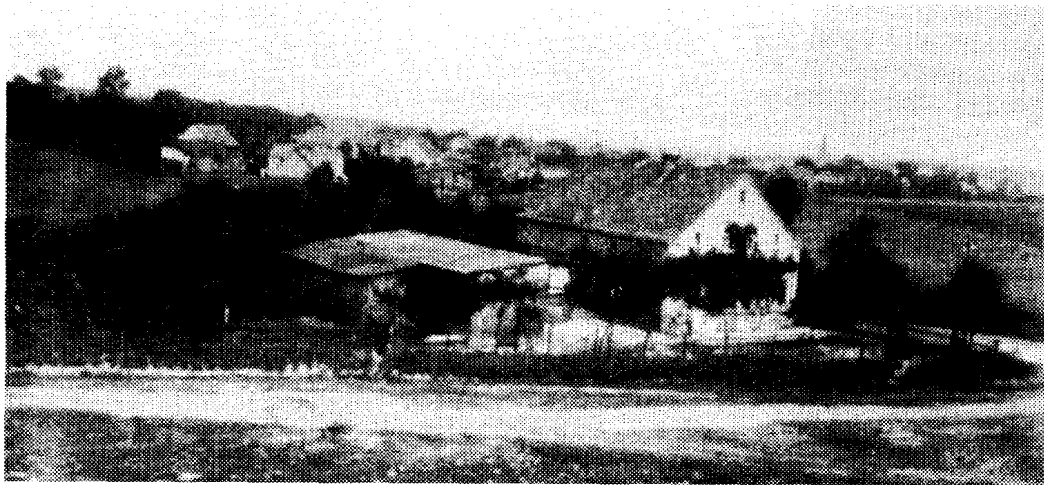
この185の学校田園寮の報告には、ニコライが言うように山間の寮もあれば海浜の寮もある、草花に囲まれた寮もあれば雪に閉ざされた寮も、また、荒れ地の中の寮もあって、まことに多彩である。多くの報告には写真が添えられていて、学校田園寮の様子や児童生徒、教師、また、援助する父母や炊婦の様子も窺うことが出来る。児童生徒らは、スポーツや読書、野外学習、木工や農園作業、あるいはコンサートやテニス、水泳、裁縫、料理に真剣に取り組んでいるのである。

## (2) 学校田園寮の運営形態

この学校田園寮には決まった運営方式というものはない。各校の寮が、置かれた条件や、教師、また、父母・援助者の状況に応じてまったく独自に自分たちの運営方式を作りあげるのである。

### ①市立リチウム（ベルリン）

たとえばベルリン・ランクヴィッツの市立リチウムの学校田園寮（ヒンターポンメルン）では、生活はおおよそ次のようである<sup>(16)</sup>。



学校田園寮遠景



洗濯



朝の体操



コーヒータイム



食事の準備



水 浴

写真4. ベルリン市立リチウム学校田園寮（ポンメルン）

起 床 :	6 : 00
体 操 :	7 ~ 7 : 15
最初の朝食 :	7 : 30
授 業 :	7 : 50 - 10 : 15
第二の朝食 :	10 : 15
昼 食 :	1 : 00
コーヒー :	3 : 30
散歩, シャワー :	4 ~ 6 : 00
夕 食 :	7 : 00
就 寝 :	9 : 00

図1. ベルリン市立リチウムの学校田園寮生活

いわゆる「授業」は午前の半分（2時間強）で終わりだ。それからは、学習グループを作って実践的に題材に取り組み、これを深化させる。その後は、自分たちの生活活動となっている。午前グループが第一朝食・第二朝食を準備し、午後グループが洗濯と午後のコーヒーを準備する（3日交替）。午後、ヒンターボンメルンの農村の生活を知りに、村落に出向いて土地の人々と仲良くなったり、ミルクや卵、野菜やジャガイモを購入したりする。また、自由時間は自分たちで企画、実践するのである。普通は彼女らは、学問教科を自分で深めたり手紙を書いたり、あるいはまた、音楽を演奏したり新しい<sup>リート</sup>歌曲を試したりと、精神の自由な休息を最大限重視している。ここには、かつての田園教育舎が課業や鍛錬に明け暮れていたような姿はないのである<sup>(17)</sup>。

## ②ケーニヒ・ヴィルヘルムギムナジウム（ブレスラウ）

また、ブレスラウのケーニヒ・ヴィルヘルムギムナジウムでは、1921年に財団を作って、シュレジェンのナイセ河畔の学校田園寮を運営した。当時の校長はリヒターといい、彼はその後プロイセン政府に入って厚生省の審議官となった人物である。インフレの時期に、父母の支援もあって漸く30室の宿泊施設を備える大きな田舎屋敷を入手できた。ここには4モルゲンの土地が付いていて、そこに野菜を栽培し、また、草地にイチゴや果樹を育てている。ギムナジウム生徒はここに宿泊して畑仕事やクリケッ



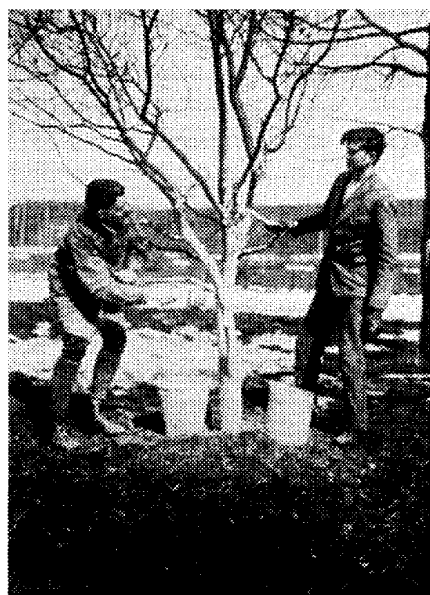
ナイセ河堰



タベの集い



寮母さんと



庭仕事



クリケット



ボブスレー

写真5. ブレスラウのケーニヒ・ヴィルヘルムギムナジウムの学校田園寮（シュレジェン）

ト、水泳、また、生徒コンサートに興じたりしている<sup>(18)</sup>。このシュレジェンの地の学校田園寮風景を見るとき、我々は、かつてポーランドのユダヤ人教師・医師「コルチャック先生」が、夏期休暇村「小さなバラ」で生徒たちと過ごした生活が想起されるのである。「小さなバラ」で、彼らは、水浴や食事などの生活、また、生徒自治の一つの典型的な表れである「生徒裁判」などをともに作り、担っていったのであった<sup>(19)</sup>。

このように児童・生徒と教師が共同生活の中で人間として相対していくことが、学校田園寮における〈教育〉(Erziehung)(=人格形成)なのであった。それは、都市の教室の中で展開される「教授」(Unterricht)ないし「紀律」(Zucht)中心の教育ではなくて、自然の奥懷に抱かれながらこれを深く味わい、精神の休息を実現する、また、探求を深め、スポーツや芸術に親しむ。さらに、田舎の人々の生活を知りこれに自分たちも親しんでゆくのであった。この時代に、「シュレーバー菜園運動」などを起源として発した「菜園学校」(Gartenarbeitsschule)で子どもたちが自然を友として農業や自然学習に親しんだのであるが、「学校田園寮」は、いわば青年版「菜園学校」の意味合いもあったと言えるであろう。

### ③高等実科学学校アイムスビューッテル (ハンブルク)

ハンブルクは学校田園寮を積極的に推進したところである。たとえば高等実科学学校アイムスビューッテルでは、学校田園寮滞在のために、ハンブルク上級教育局からの貸付を得て、学校田園寮に2クラス60人が安定的に滞在することが出来た。当校では500人ほどの生徒が学校田園寮での散策、スポーツ、冒険に挑戦している。(普通は、ほとんど全員の親そして教師が「会員」となって、「組合」を作り、経費を積み立てる)。<sup>(20)</sup>



表 2. ハンブルク・アイムスビューッテル高等実科学学校の  
学校田園寮滞在者数（1925～1928 年）

年	参加生徒数	総滞在日数
1925	639	11,456
1926	555	9,469
1927	540	8,884
1928	486	9,747

#### ④マルクマン通り男子国民学校（ハンブルク）

また、注目されることであるが、国民学校でも学校田園寮が設けられている。ハンブルクのマルクマン通り男子国民学校では、ハンブルクの元総領事フレアス（Der alte Herr Generalkonsul Fleas）が、「子どもの友」運動に理解があり、彼の助力でバルト海岸のホテル（12 室と食堂，バルコニー等を備える）を取得して，子どもたちの海岸滞在を実現した。北海海浜に 4 週間滞在して費用は 35 マルク。毎年 200 人以上の児童が海辺の 4 週間の生活を楽しむのである。費用は親の支弁が 8 割，その他に，積み立て制の「学校寮金庫」（Schulheimkasse）から 1 割強，残りがその他からとなっていた<sup>(21)</sup>。

#### ⑤テール高等実科学学校（ハンブルク）

ハンブルクで最も古い学校田園寮はテール高等実科学学校のものだ。学校田園寮は，1921 年に，田舎屋敷（1856 年に建築）を同校が取得したもので，ここに 2 クラス，60 人の生徒が宿泊するのである。田舎屋敷でも教師室 1，生徒寝室 9 室，薬剤所を備えた保健室やタイル張りのシャワー室，電気ポンプで水道が流れる 12 の洗面台と，集団の生活に必要なものは整っている。生徒たちは，青空学級をしたり木陰で食事をしたり，また，遊びやスポーツと，小農家での暮らしを楽しんだのである。当学校田園寮は「テール高等実科学学校学校田園寮組合」を設立して，これが財政問題を含めて一切の運営を営んだ。会員は親と教師その他で 750 名である。（当校

の生徒数は 500 人であった!!)。組合は学校田園寮経費に補助を行なっている。(生徒滞在費一日 1.9RM の 10%)。また、貧しい生徒の学校田園寮滞在費や研究旅行などへの補助をおこなうほか、学校新聞の発行も行なっているのである。当校の学校田園寮報告には、会費の積み立てと運用状況とが紹介されていて興味深い。それによると、次のようであった<sup>(22)</sup>。

図 2. テール高等実科学校学校田園寮組合支出

### I. 組合一般収入

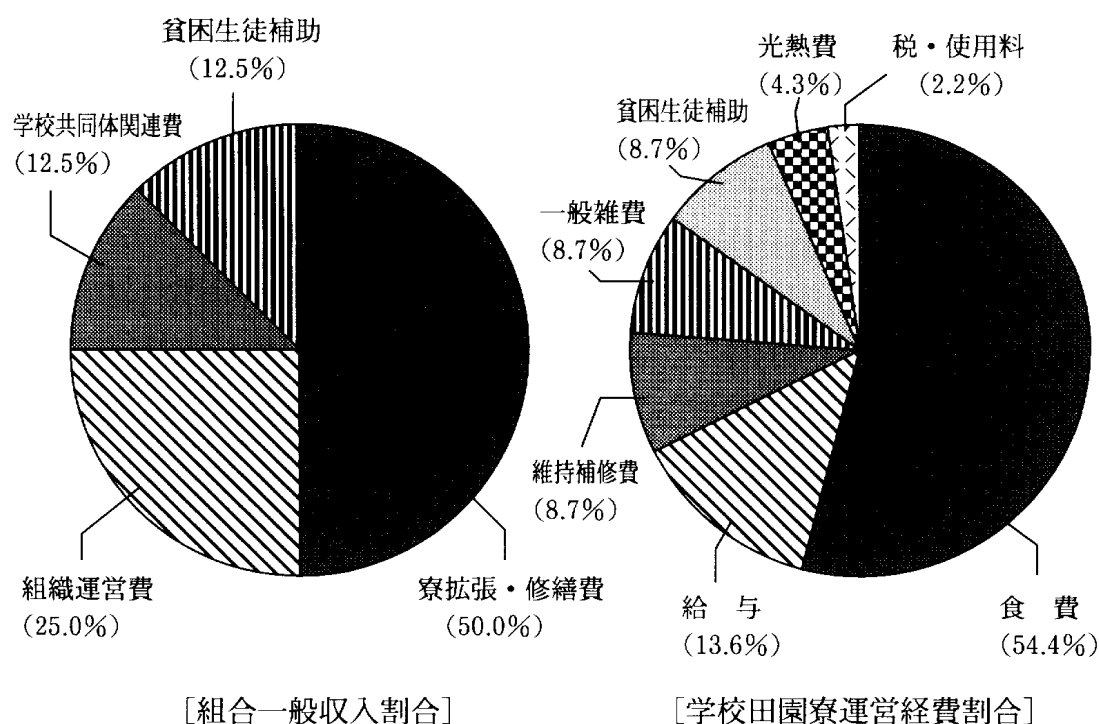
500 名 [父 母] 会員会費 (年 6RM) — 3000RM

250 名 [その他] 会員会費 (年 4RM) — 1000RM

計 4000RM

[支出内訳]

費 目	金額 (RM)	割合 (%)
寮拡張, 修繕	2000	50
組織運営費 (事務所, 印刷, 郵便, 電話, 学校新聞)	1000	25
学校共同体関連 (学校図書, 父母の夕べ, チェスグループなど)	500	12.5
遠足, 旅行, ボートの補助	500	12.5



## Ⅱ. 学校田園寮運営経費

費 目	経費 (RM)	1日の経費 (RM)	割合 (%)
食 費	10,000	1.25	54.4
給 与	2,400	0.30	13.6
維持補修費	1,600	0.20	8.7
一般雑費	1,600	0.20	8.7
貧困生徒補助	1,600	0.20	8.7
光 熱 費	800	0.10	4.3
税, 使用料	400	0.05	2.2
合計 (8000 滞在日)	18,400	2.30	100.0

以上によってドイツ全体の学校田園寮の基本傾向は把握できるであろう。

『全ドイツ学校田園寮連盟（登録協会）：イラスト入りハンドブック』には、連盟の「定款」も掲載されている。それによると、「連盟」は本部をベルリンにおき、理事長と加盟団体の大会とを連盟の機関と定めているだけの簡素なものである。連盟は「ドイツの学校田園寮運動を促進し、もってドイツの学校制度の刷新に寄与する」とし、そのために、

- ①学校田園寮設立、運営に助言を与えるセンターの設立
- ②当局に対して共通の関係事項の主張——保険や税金問題等——
- ③公衆の中での学校田園寮の宣伝
- ④大会での議論
- ⑤学校田園寮思想の推進と図書館の設立

を掲げている<sup>(23)</sup>。

つまり、学校田園寮は、その置かれた状況の中で、各学校、各市、州・邦、また、教師父母そして生徒たちが創意的に展開運営することを期待しているのであった。学校田園寮は、まさに、ヘールマンが述べるように「田園と結合することにより都市と農村の対立を克服して、その地域の諸関係にふさわしい総合学習を展開し」もって「学校の訓育活動と子どもの身体・健康促進にとって重要な役割を果たす」場となっていたのである<sup>(24)</sup>。

### 3. ベルリン新教育と学校田園寮

さて、そこでこの学校田園寮がベルリン新教育といかなる関係にあったかということを考察してみよう。

ドイツの学校田園寮の発展は以上の通りであったが、ベルリンにおいては、これとはまた異なった展開が見られたのである。つまりベルリンにおいては、市当局（イエンス・ニダール教育長を中心とする）の指導のもとで、市立学校田園寮「ツォッセン若者村」のほかに、さらに「ツェルペンシュロイゼ学校田園寮」、「ヘルムスドルフ・ペスタロッツ学校田園寮」と合計 3 つのベルリン市立学校田園寮を建設し、また、これの利用に当たっては市政府の援助が予算計上されて、ベルリン児童生徒への教育・福祉プログラムが行政の側から力強く推進されたのであった。こうしてベルリンにおいては、上記市立学校田園寮 3、通例の中等学校の学校田園寮 21、他局の同じような青少年施設 5、国民学校の学校田園寮 1、と合計 30 の学校田園寮を保有して（1930 年時点）、市全体として学校田園寮運動に取り組んだのであった<sup>(25)</sup>。ベルリンにおいては、青年運動や菜園学校運動を与件とし、その上に、児童生徒のこころと体の発達を促進しようとする新教育運動が重なり、また、これを支援する行政当局の積極的対応があり、さらに学校建築の点でも新境地を切り開きながら、学校田園寮運動が重層的に推し進められていったということができるのである。以下、ベルリンにおける学校田園寮の展開を述べることにしよう。

#### 一、中等学校の学校田園寮

ベルリンにおいても学校田園寮の必要性は早くから気づかれていた。しかし特に、「[第一次] 大戦後初期の時代に大都市青少年の甚大な静養の必要性 (eine außerordentliche Erholungsbedürftigkeit) があらわになり、そのため青少年の健康を気づかうすべての人々が子どもたちに田園滞在の機会を与えることが必要だと考えるようになったときには、すでに、教育

行政当局や指導的教育家の間でも、教師と生徒が親しく共に数週間共同生活するこの新しい形態がまさに教育的にも計り知れないほど大きな意義をもつ思想の実現なのだということが認識されたのであった」（ニダール）<sup>(26)</sup>。

初めに学校田園寮をリードしたのは中等学校であった。1928年の時点で、次の14の中等学校が、ベルリン以外のドイツやベルリン近郊に独自寮を所有（ないし契約）していた<sup>(27)</sup>。

表 3. ベルリン中等学校の学校田園寮 (1928 年)

番号	区	学 校 名	学校田園寮所在地	夏学期寮・冬学期寮	収 容 力 (ベッド数)	摘 要
1	1～6区	ケルン・ギムナジウム	カブロウ	夏学期寮	50	同窓会所有
2		フンボルト・ギムナジウム	ハーフェル河畔シュトルベ	夏学期寮 冬学期寮	17 生徒 2 教師	
3		ドロテーエ・市立実科ギムナジウム	リーゼンゲビルゲ・アルンスベルク	夏学期寮 冬学期寮	24	
4		フリードリヒ・ギムナジウム	ベーリッツ・ボルク	夏学期寮	40	
5		ルイーゼ・市立高等実科学学校	トレブニッツ・クライネミューレ	夏学期寮 冬学期寮	20	父母会が賃借
6		リービヒ・実科学学校	東シュテルンベルク・トレボウ	夏学期寮 冬学期寮	60	
7	シャルロテンブルク	カイザー・フリードリヒ学校	ヴェンディシュ・ケーテン	夏学期寮 冬学期寮	30	
8		フルスティン・ビスマルク学校	フェルヒ・ケムニッツ荒地	夏学期寮 冬学期寮	30 女生徒 4 教師	主に週末に利用
9	ヴィルマースドルフ	フィヒテ・ギムナジウム	レーヴェンベルク・レーン	夏学期寮 冬学期寮	60 以上	間借りのみ
10		グルーネヴァルト・ギムナジウム	ハーフェル河畔ヴェルダー	夏学期寮	26	同校友の会所有
11	ツェーレンドルフ	高等実科学学校	ラインスベルク・カガール	夏学期寮	30	同校所有
12	シェーネベルク	フリーデナウ・ギムナジウム	ヴェルダー・グリンドウ	夏学期寮	30	
13	リヒテンベルク	改革実科ギムナジウム	ウッカーマルク・タンガースドルフ	夏学期寮 冬学期寮	50	
14		カント校カールスホルスト	ニーダーフィノウ	夏学期寮 冬学期寮	60	

一覧表から見られるように、ベルリンの場合も、学校田園寮の立地や規模、また、利用形態は様々であった。『ハンドブック』には先に述べたベルリン市立リチウムなど 15 の学校田園寮が報告を寄せている。寮の所在地はベルリン市内、ベルリン近郊、さらには下シュレジエンにまで (3 寮) 及んでいた<sup>(28)</sup>。[次図参照]。

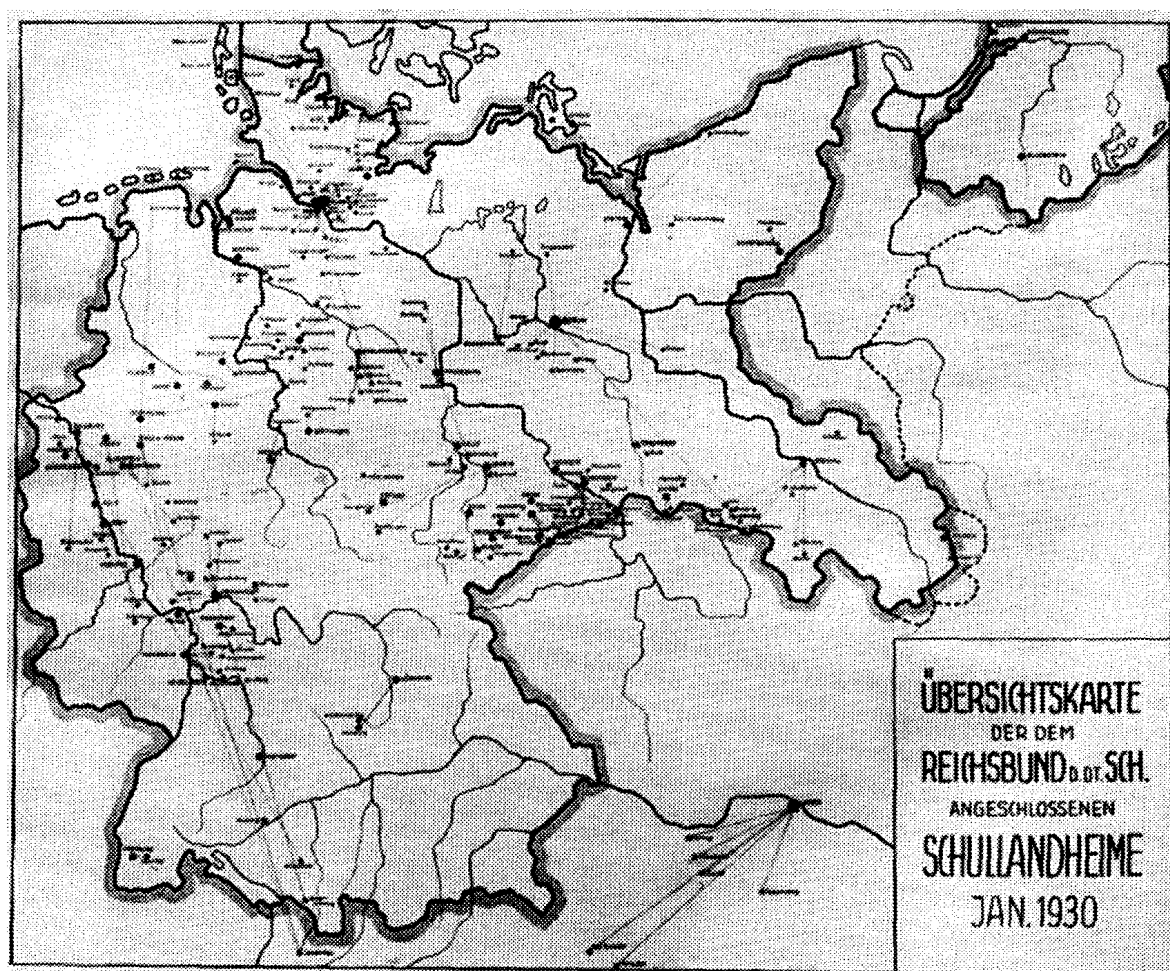


図 3. 全ドイツ学校田園寮連盟加盟の学校田園寮一覧（1930 年）

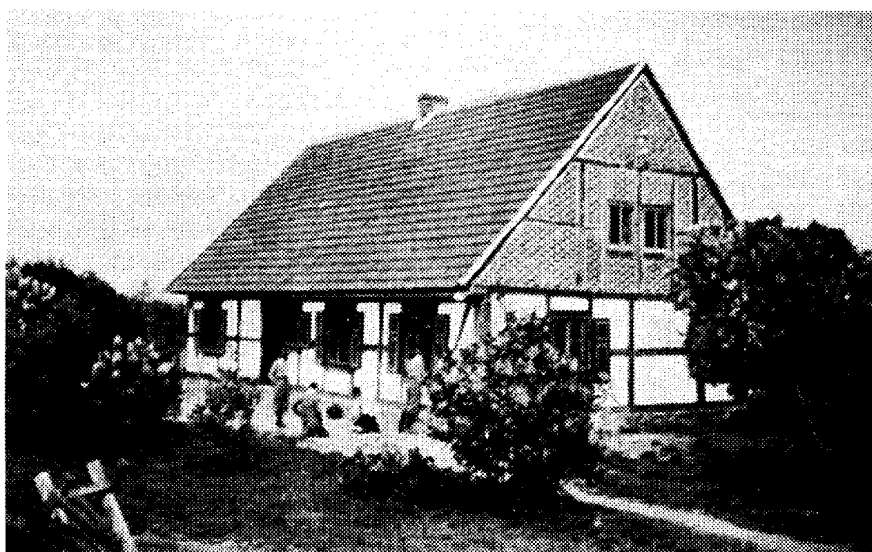






写真6. ベルリンのカイザー・フリードリヒ改革ギムナジウムの学校田園寮（ケーテン）

そして、そこに思い思いの形で自然との生活が展開されていたのであった。そのいくつかを概観すると次のごとくである。

### ①カイザー・フリードリヒ改革ギムナジウム（ベルリン・シャルロッテンブルク）

シャルロッテンブルクのカイザー・フリードリヒ改革ギムナジウムでは、1925年に「シャルロッテンブルクのカイザー・フリードリヒ校友の会」を作って、会長には校長が就任した。ヴェンディシュ近郊ケーテンの学校田園寮は1926年に購入。元の農家屋敷だ。6寝室、2部屋、台所、地下蔵、ベランダあり。建物の補修費は学校の催し物や親・有志のカンパに依った。ここに教師の指導で8～14日間滞在する。内容は授業、自由研究、午後の散策・ゲーム・スポーツ。貧しい生徒には滞在費の割引や免除がある。かくして学校田園寮の体験は授業の上でも、健康の上でも、また、倫理的な方面においても意味深いものとなっている<sup>(29)</sup>。

### ②グルネヴァルト・ギムナジウム（ベルリン・グルネヴァルト）

グルネヴァルトのグルネヴァルト・ギムナジウムは、創意的な授業の柔構造化の典型校として知られる。校長フィルマー（Dr. Vilmar）の下に、英語を共通外国語とする「統合下級段階」の改革型ギムナジウム、上級の「フォーク型分化」とそれをさらにすすめた「上級段階の移動の自由」、さらに「中心・コース制」などなど。学校田園寮は、これらの授業改革と連動して歴史を刻んだのだ。つまり、「移動の自由」という最大限に自由な授業編成の導入によって、ややもすれば欠けがちになる人間形成的側面（*erzieherische Seite*）を補うものとして、学校田園寮での自由な探求や交わりは不可欠のものだったのだ。ハーフェル川の中之島に1.75モルゲンの土地を備え、水と美しい田園に囲まれたヴェルダーの学校田園寮は、「グルネヴァルト友の会」の財政支援の下に、昔の牛小屋を改造したものだ。ここに最大30人が1週間宿泊しながら、午前の3時間の探求学習（強制のない形での）、そして自然との交わりが行なわれる。費用は1日1.5～2RM。スペースに余裕があれば、卒業生や他校の生徒も歓迎だ。か

くしてここでの生活は社会性、共同性、公民性、こころと体の健康——の育成に大きくあずかっている<sup>(30)</sup>。

### ③ユダヤ人教区

オラニエンブルク通りのユダヤ人教区には学校田園寮がない。また、今後もそれを取得する計画もない。財政困難が最大の理由だ。しかし、ハルツ山中のユダヤ人協同体の寮に、当ユダヤ人中間学校女生徒が宿泊して成果を上げている。さまざまなクラスからなる25人の女生徒たちが2週間、自分たちの好みや才能に応じて図画や家庭科に熱心に取り組んだ。ユダヤ人共同体の学校（複数）が、オラニエンブルク近郊レーニッツに移る計画が、今進行中だ。そうすればハルツ山中の寮を学校田園寮にすることができるかも知れない<sup>(31)</sup>。

ベルリン中等学校の学校田園寮を見て気が付くことは、新教育と学校田園寮とが深く関わっている、——というよりはむしろ、学校田園寮が新教育の本質を発現している——ということである。グルネヴァルト・ギムナジウムの事例がまさに象徴的であるが、いずれの学校田園寮においても、自立的・探求的な学習、共同生活を通してのこころと体の発達、自然や労働への接近がめざされているということである。財力の乏しいユダヤ人教区においても、当ユダヤ人共同体が、その教育的意義をみとめ、積極的にこれを推進しようとしているのである。

また、いずれの学校においても、教師、父母の共同の力が、学校田園寮推進の担い手だということである。各校は「友の会」を作り、これに親、教師、卒業生や有志の参加を得て学校田園寮を取得、また、運営、展開しているのである。「シャルフェンベルク島学校農園」の母胎、フンボルト・ギムナジウムの「シュトルペ荒地」学校田園寮設立にあたっては、青年運動に共鳴した若手教師ヴィルヘルム・ブルーメ（Blume, Wilhelm 1884～1970）や上級生徒たちを中心に「生徒自治令」の具体化が熱心にはかられたのであるが、学校田園寮の設立にはいわばその学校の教育的力量が反映していた<sup>(32)</sup>。学校田園寮を実現した各校を見ると、教師、父母、そし

てときには卒業生も加わって粘り強く努力を行なった結果として、学校田園寮を実現し、また、運営も自主的に行なうことができていったと言えるのである。

## 二、市立学校田園寮の建設

しかし、それでもなお、上記ギムナジウムをはじめとする中等学校は特権的学校であった。多くの市井の若者、特に一般の国民子弟の通う学校である国民学校や中間学校の生徒のための学校田園寮、また、女子のための特別の配慮、さらには障害者や養護児童のための特別の配慮を行なった学校田園寮——そうしたものは未だ実現してはいなかったのである。しかし、ベルリンの教育行政は、こうしたものの実現に向けて、厚生庁や建築庁、また、医者や建築家と共働してこれに取り組んだのである。ここに、都市自治体ベルリンの社会福祉的な教育行政が表れているのであった。

1926年に大ベルリン第3代教育長に就任したイエンス・ニダール(Nydahl, Jens 1883~1967)は、市立学校田園寮建設に精力的に取り組んだ。市立学校田園寮への期待を彼は『ハンドブック』で大要次のように述べていた。

…ほんのわずかの学校だけが、独自の費用でこのような寮を建設できる——そのためには現在、一度にじつに多くの経費がかかる——という状態であると言ってよいだろう。

本市が今とりかかっている計画は、ベルリンを次第次第に学校田園寮の花冠で取り巻くことである。その暁に、学校田園寮の運営を各校に任すか、中央行政の下に委ねるかは未だ決まっていない。それは学校田園寮の思想と実践の発展に委ねるべきであろう。だが、いかなる場合でも、学校田園寮の設立に当たっては各校の決断力が断じて妨げられてはならないということは、はっきりと述べておきたい。

このことはすでに当市が行なっている次の援助策からも明かであろう、つまり、本市は全校種の学校田園寮滞在に当たって——それが市

立学校田園寮であれ各校の独自寮ないし私人の寮であれ——，貧困生徒には1日あたり最大1RMの支出を行ない，講師の旅費，滞在費を肩代わりし，さらに，休暇中の学校田園寮滞在における講師を自発的に引き受けた者に1日3マルクの費用を保障しているのである…。<sup>(33)</sup>

つまりベルリンにおいては学校田園寮を市の周りにめぐらす計画であり，また，学校田園寮滞在を教育上意義あるものとみとめ，全校種で（つまり市教育行政が担当する国民学校，中間学校，中等学校，特殊学校関係ということになる）これへの援助を ①貧困生に1マルク（1日） ②教師の全費用 ③他のボランティア教師に3マルク（1日），としているのである。これは，ニダールを中心とした市立学校田園寮の設立，運営が成功裡に展開されていることを背景に語られているものであり，事実の重みを伴った指摘である。そこで，以下，ベルリン市立学校田園寮の建設と展開について述べることにしよう。

#### （1）前史——青少年局によるショイエンスchool田園寮等

ベルリンの児童福祉庁（Deputation für Jugendwohlfahrt）は実際の活動は「ラント青少年局」（Landes-Jugendamt）として展開しているのであるが，この青少年局ならびに各区の青少年局の寮活動が市立学校田園寮建設の前史と位置づけられる。

大戦後の欠乏の中で，かつてのように私費負担で，静養の必要な生徒らを「林間学校」（Ferienkolonie）に多数送ることは不可能となった。そこで青少年局は，次のような新たな方策を取ったのである。

ア．田舎へ送る，

イ．より大きなコロニー（青少年局がバルト海やショイエンスchoolに建設した）に送る。

##### ①ショイエンスchool

ショイエンスchool（Scheuen）はベルリンから西へ200キロ離れた地で，ハン

ブルクとハノーヴァーの間、「リューネブルク荒地」(Lüneburger Heide)の中にある。そこは現在「自然公園南荒地」(Naturpark Südheide)とされているので、当時から国民の保養地であったのだろう。

ここに、かつての軍の飛行場のバラックがあった。ベルリン青少年局は、これを改造して学校田園寮にしたのだった。ここでは4月から12月の間、450人の子どもたちを一度に収容することができた<sup>(34)</sup>。市庁建築官で「博士・大卒技官」のデリウス(Dr. -Ing. Delius, Hellmut)の報告には当学校田園寮の写真も添えられていて、それによればショイエン学校田園寮は、広々した荒地に建つ2階建ての大きな構築物である。内部には講堂、食堂、寝室、調理場、シャワー設備等が備わる。450人の子どもを一度に収容可能ということは、たしかに大規模な寮ならではの<sup>(35)</sup>。

## ②ネスト

バルト海ネストでは、男女合計800人の要保養児を受け入れている。寮の展開には、教育者以外に若い監督者を必要とした。児童30人に1人の監督をおき、監督者は最大15人必要であった。

ここには通常の「授業」というものではなく、あり余る自然の中での「臨機応変学習」(Gelegenheitsunterricht)が行なわれたのである。したがって、生徒らは自分たちの関心のおもむくままに過ごしたのであった。

だが、『ベルリンの教育制度』は、ここでの問題性を指摘している。つまり、これら「臨機応変学習」の結果、学習の遅れが顕在化して、帰郷後は成績低下のままか、さもないと2倍の努力をして遅れを回復するか、の選択を迫られたというのである。さらに、この地では他校生も合流したために、生徒らはいつもの学級協同体から切り離されて、他校教師の下に置かれて必ずしも成果が上がらなかったという<sup>(36)</sup>。これらの問題性が、自校の学級単位を受け入れる市立学校田園寮の建設を促したと言えるのである。

## (2) ツォッセン学校田園寮 (市立第一学校田園寮)

1924年、教育庁とベルリン青少年局は合同で、ポツダムの、かつての

軍隊宿营地ツォッセン（Zossen）を、中央棟と沢山の寮宿舎からなる一大学校田園寮村とすることを決定した。これがのちに「《ベルリン若者村》ツォッセン」（„Berliner Jugendland“ Zossen）と称される市立学校田園寮の始まりであった。

1925年に、元の粗造り建築を改装した中央棟をもって市立第一学校田園寮が誕生し、やがて翌年、14の個別寮も落成した。建築の責任はベルリン市青少年局で、実際に建設を担当したのはテンペルホフ区建設局である。『ハンドブック』により、まずはその建築的側面を見よう。

ツォッセンはベルリン南方の地であり、ベルリン・ポツダム駅から約1時間のところにある。あたりは森と水が豊かで、広大な田園風景が魅力的だ。ここにあったかつての軍兵舎は、1925年から1926年にかけて、縦13.5メートル、横41メートルの2階建ての大きな学校田園寮に改築された（中央棟）。これは、完全に区切られた2つの寮である（男女別あるいは学年別の利用ができるように）。ショイエンやネストとは異なり、一年を通して宿泊できる。ここにさらに14の個別寮が建設されて、「村」は最大840人の児童が一度に4～6週間宿泊できるというものだ。中央棟1階に食堂、教室（2室）、リビングを備え、2階は各30人、合計60人の宿泊能力をもち男女は完全に分離されている。全室に暖房設備が整い、シャワーや洗面設備など必要なものは揃っている。また講師室各2、合計4室を備え、半地下は日帰り滞在者室や暖房装置などが置かれている。中央食堂が「若者村」全体の食事を担当する。これにより、各独立寮ごとの食事経費を相当節約できる。ツォッセン学校田園寮は「美観」にも配慮してある。そこは兵舎ではないからだ。子ども達のところが軽くなるよう明るい色で彩色が施され、窓カーテンも美しく飾られた。個別寮の真ん中に配置された広場には各寮からすぐに遊びやスポーツに出られるようになっており、また、外の森へも行けるようになっている。個別寮の建築には平均5万RMかかった。個別寮14棟だけで合計70万RMになる<sup>(37)</sup>。

さて、その展開であるが、ここには普通1クラスが4～6週間滞在したという。都市の家並みを脱して自然の中で滞在した生徒は、年間1000人。将来は2000人と見込んでいる。かつてのショイエンやネストとは異なって、秩序だった学習もおろそかにしなかったというから、田園静養と「飛ぶ教室」(ケストナー)との両方がここで実現したと言えるであろう。

ベルリン南部、ノイケルンにおいて創意的な新教育実践を展開したフリッツ・カルゼン (Karsen, Fritz 1885～1951) の「カイザー・フリードリヒ実科ギムナジウム」は、自校の学校田園寮を持たなかったためにこのツォッセンの「若者村」を度々利用して、自然と親しみ、自治と協同体生活を展開しながら実地学習を進めたのであった。カルゼン校の、ツォッセンの利用状況は次のようであった。

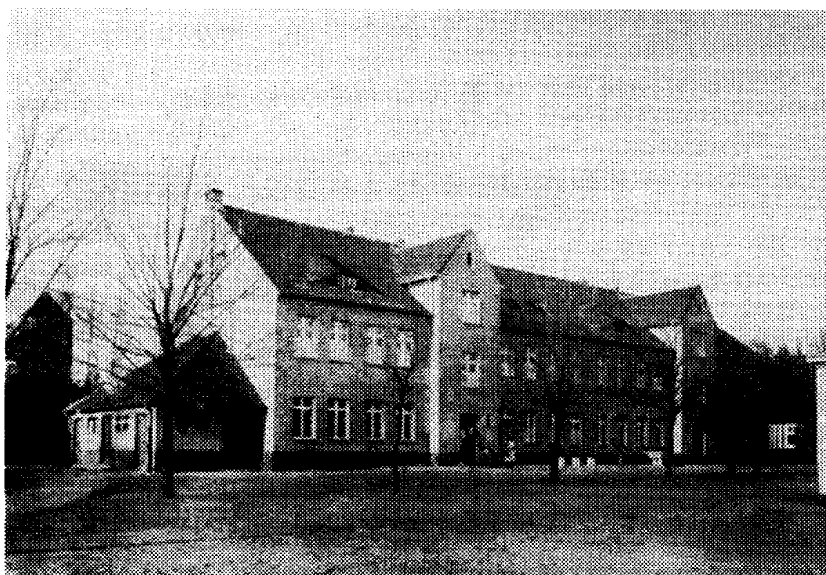
- ・1927/28年——実科ギムナジウムと上構学校計12クラス、320人が14日間滞在
- ・1928/29年——上構学校8クラスが14日間滞在,  
その他見学旅行に行かなかったU3学年3クラス,  
U2学年2クラス、O2学年200人

ここで身体活動や精神の集中、共同生活の促進、そして中、上級生の場合には特に授業への刺激物として大いに効果があったという<sup>(38)</sup>。

なお、ツォッセン若者村には、幼児や就労少女のための施設も備わっていたのが出色である。それらはつまり次のものだ。

- i) 幼児保養寮 (Kindererholungsheim) ——かつての「将校クラブ」の中に作られた「雀のお宿」とか「鳩小屋」といった寮に、幼稚園児も宿泊した。
- ii) 乙女寮 (Jung-Mädel-Heim) ——就労少女の保養寮
- iii) 家政学校 (Haushaltungsschule) ——戦争孤児のための寮





中 央 棟



食 堂

写真7. ベルリン若者村ツォッセン（市立第一学校田園寮）

中央棟と14の個別寮、そしてこれらの全体が「若者村」を成していて、ツォッセンは、一種の「教育州」(Pädagogische Provinz)であったのだ。ツォッセンの市立学校田園寮は、ベルリン教育当局、青少年局、父母、教師の誇るに足るものだとの評は決して過大なものではないだろう<sup>(39)</sup>。

### (3) ツェルペンシュロイゼ学校田園寮 (小規模な学校田園寮)

他方、ツォッセンのような大規模でない学校田園寮、つまり、かつての中等学校の自校方式による学校田園寮のような環境を、国民学校生徒にも利用可能とさせたのがツェルペンシュロイゼ学校田園寮である。これはニーダーバルニム郡(ベルリンの北方。ライニケンドルフ・ローゼンタール駅から1時間半)の申し出で、郡内の地主屋敷をベルリン市に賃貸したものである。1926年から10年間の契約で、改築も認められた。同地はフィノウ運河に面し、森も遠くない。(ちなみに地名「ツェルペンシュロイゼ」の「シュロイゼ」は「水門」を意味する。恐らく、昔ここにフィノウ運河の、ないし運河以前の水門があってこの名が付けられたのであろう。あたりは海拔30メートルほどの低地で湖や運河が多い。運河はオーデル川[ベルリン東部]とハーフェル川[ベルリン西部]とを結んでいる)。改築成った運河沿いの豪華な学校田園寮に120人が宿泊可能で、さらに、その後の増築で収容力は51人増えた。増築工事には国民学校生も加わって、文字通り「自分たちの寮」となる。施設としては寝室(2)、教室(2)、大食堂、生徒居室、中庭園(菜園ができる)、また最新のプールがあるというのがユニークだ。

昔の地主屋敷の管理人の建物に寮監が住み、ここに教員室もある。また、病室を備えているのも注目される点で、これは、学校田園寮設計の段階から校医の監督が行なわれたからだった。ツェルペンシュロイゼの利用状況は次の通りである。

- 1926年——510人男女生徒
- 1927年——611人
- 1928年——750人(見込み)

また、報告によれば、今後セントラル・ヒーテイングを設置して冬でも滞在できるようにする予定という。これにより、冬の利用もさらに増加することであろうと同書は述べていた<sup>(40)</sup>。ちなみに建設費用は最初の改装に 18,000RM, 次の増築に 76,500RM, 合計で 94,500RM となる。

#### (4) ヘルムスドルフのペスタロッツ学校田園寮（市立第二学校田園寮）

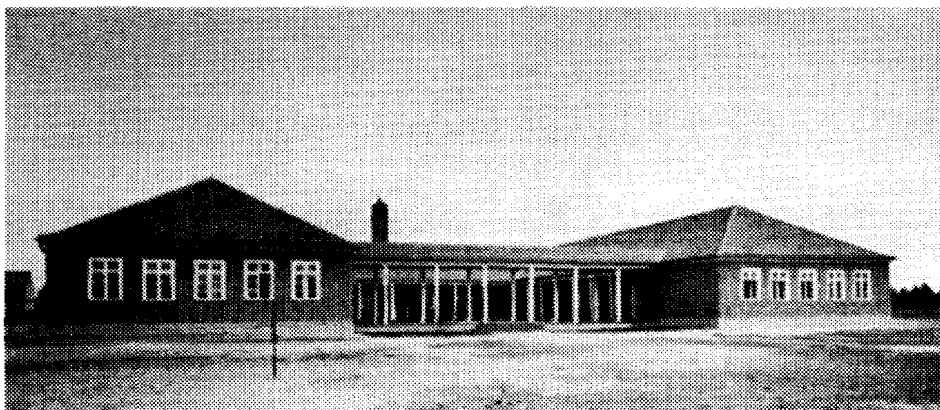
1927 年はスイスの教育家ペスタロッツ（Pestalozzi, Johan Heinrich 1746～1827）の没後 100 周年だった。この記念すべき年に、ベルリンでは、市庁舎で記念祭を催すとともに、彼の名を冠した「ペスタロッツ学校田園寮」を建設することとなったのだ。当田園寮の力点は、

- ア. 学業をおろそかにせずに、力強い田園滞在を実現する
- イ. 共同生活を通して子どもらに連帯心（Gemeinschaftsgedanke）を育てる、

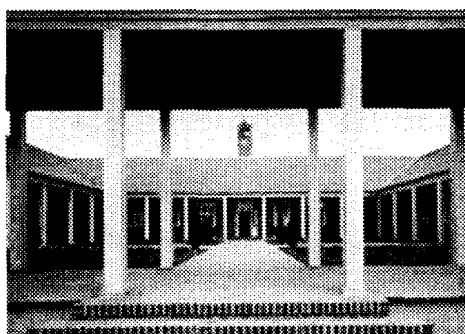
の 2 点に置かれた。

市教育行政当局はドゥブロウ（Dubrow）の森ダーメ河畔のヘルムスドルフに 11.5 ヘクタールの土地取得を提案し、1927 年 2 月 23 日ならびに 3 月 17 日に自治体間で合意がなされた。（ヘルムスドルフはベルリンの東南方に位置し、ツォッセンからさらに東南に 25 キロメートルほど離れた地である。ここには製粉所があって、ベルリン市はこれを拠点として学校田園寮を建設しようとしたのである。当地のダーメ川はこのあたりで滝をなしているので、この水流によって、かつて製粉所が営まれていたものと思われる。ダーメ川はシュプレー川に注いで東からベルリン中心部を通り、ハーフェル川に合流する。）6 月 22/28 日、学校田園寮の設立と、そのための改修資金が用意されて、現存建物の改修が始まった。設計は市建築官ブリューニング、建築の実行は、ツォッセンと同じくテンペルホフ建築局であった。

ここは、「特別に静養が必要なベルリンの学校生徒」（besonders erholungsbedürftige Berliner Schuljugend）<sup>(41)</sup> のためを考えた建築がな



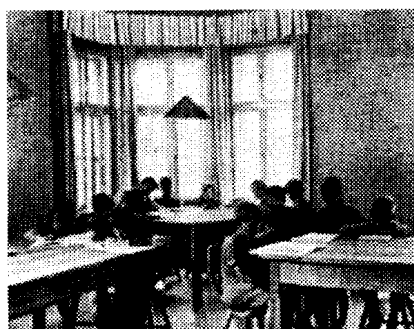
ペスタロッチ学校田園寮全景



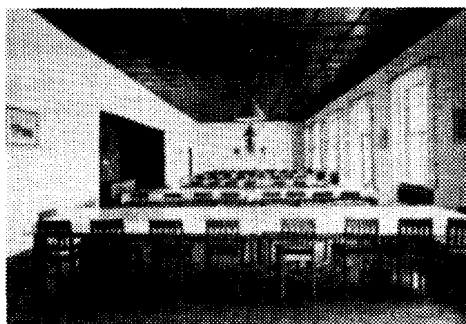
柱廊から



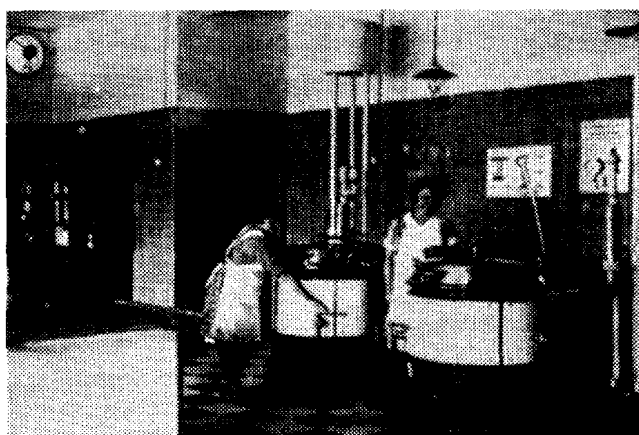
中庭から南方を望む



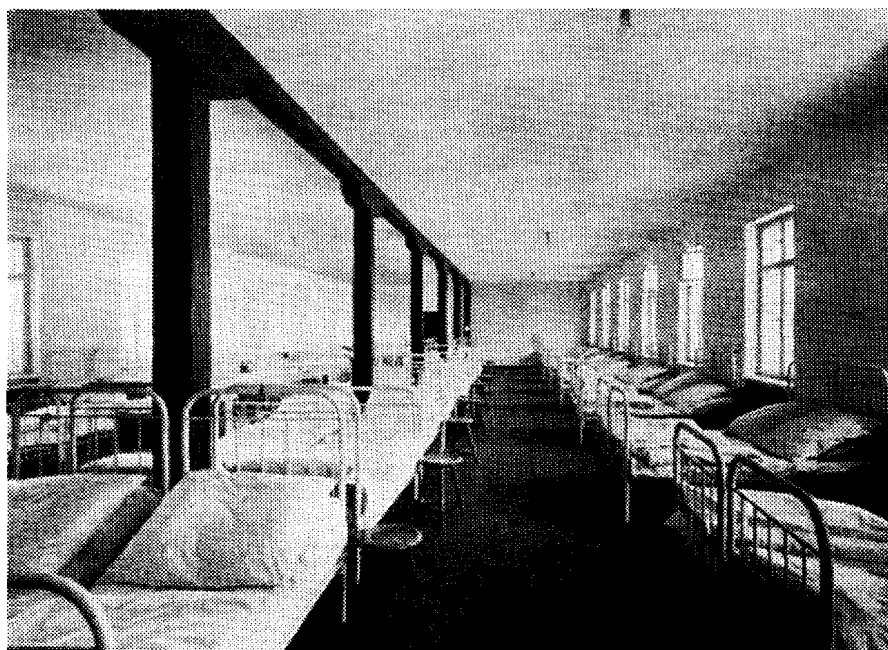
読 書 室



食 堂



厨 房



寝 室

されていた。まずはその配置である。明るい透過煉瓦で作られた平屋建ての田園寮中央棟は、南面に「コの字型」に開かれていて、間は緑の中庭だ。その向こう端は屋根付き柱廊で、これによって中央棟の左右のウイングが結ばれている。柱廊の向こうには、グラウンドと、その先にはドゥブロウの森が見<sup>はる</sup>霽<sup>はる</sup>かせる。

中央棟の中心部に近代的な厨房と食堂。左右のウイングには、それぞれ1室の授業室と50人宿泊可能の寝室だ。購入にあたって引き渡された別荘屋敷（2階建）は、管理人住居と読書室、男女生徒の居間、病室、教師個室（2室）等に充てられた。

また、外にはアスパラガス園、果樹園、牛、馬、鶏舎とまことに見事なものであり、これにダーメ川の美しい岸も加えられる。川は水浴も可能だ。

ペスタロッチ学校田園寮は、自然の中に溶け込んだ見事な構築物である。ここには、教育的観点とともに医療的観点が総合され、建築家がこれに応じて施設を作りあげていったという点が重要だ。増築、新築、また、暖房や電気設備、それに造園なども含めて総建築コストは25万RMであった<sup>(42)</sup>。

#### (5) ビルケンヴェルダー学校田園寮（市立第三学校田園寮）——建設中

ベルリン北部、ビルケンヴェルダー（これはフンボルト・ギムナジウムのシュトルペ荒地の北側である）に、市立第三学校田園寮が今（1930年）、建設中である。

ビルケンヴェルダーは市内のシュテッティン郊外駅から電車で45分のところである。辺りは森と草原、水に恵まれたすばらしい環境だ。ベルリン市教育庁は、これに割り当てられた基金（Stiftung）でもって当地のレストランを買い取り、これを学校田園寮に改修することにしたのである。

規模はごく小規模である。当面70人用を見込んでいる。昔のダンスホールが区切られ、2寝室となった。全員に鉄製のベッドと棚がある。隣室には浴室があって、常時シャワーと洗面器に温水が注がれる。好ましい明るい色で食堂、居間が彩色され、そこから厨房に入ることができる。2階には準備室（複数）と教員室。また、別棟には管理人が住むことになってい

る。

この学校田園寮は、市が特に特殊学校用に割り当てたものだ。なぜなら、当学校田園寮は障害のある生徒が行き易く、また、田舎のすばらしい環境だからである。したがって、

①ベルリン最貧の子どもたち

②身体的・精神的に病弱な子ども達

の利用を市は考えているのである。

ちなみにこれの建設費として市は1928年に5万RMを計上した<sup>(43)</sup>。

## ま と め

以上述べたように、ベルリンにおいては、学校田園寮が児童生徒のこころと体の発達のために欠かせないと考え、これの建設に熱心に取り組んだわけである。ここで、このベルリンの学校田園寮について簡単なまとめを行なってみよう。

第一。学校田園寮というものが、まさに、新教育の思想と実践に支えられたものであることは、行論から明かであると思う。その際、ベルリンの学校田園寮運動が、かつての青年運動やロマン主義的な諸運動がややもすると持っていた原初の田園回帰願望のようなもの、さらにはまた、学校田園寮生活を単なる「田園滞在」で終わらせるという弱点を克服していったことは、ショイエンやネストの経験を批判的に乗り越えた点に表れているだろう。学校田園寮は、ある意味で「飛ぶ教室」（ケストナー）であるところに、その意味を持っていたのである。それは、比較的小規模で、自然の豊かさを体験しながらこれに働きかける、また、緩やかな形で学問活動も継続される、そして自治や協同、文化、また地域の人やものとの語らいを共にする、という謂である。成功裡に展開された学校田園寮の中から、「若者の生きる場所」がこのようにして作り出されたということが言える

のである。

第二。また、学校田園寮に教育・福祉関係者のみならず、医師や建築家の関与があったことを見落とすことはできない。医師の関与は、学校田園寮における衛生や食事、寮生活の展開にとって大きな役割を果たし、また、建築家は、置かれた条件の中で可能な限り若者の生活を豊かにする環境を作り出したのだった。それが、「兵舎」ではなくて、学校田園寮に、こころも体も明るくする学校建築、庭園、菜園、あるいはプールやグラウンド等を備えさせることになったのだ。これら「人間工学」、「環境工学」といった視点の存在が、ここには認められるのである。

第三。そして最後に、筆者は特にベルリンの学校田園寮活動における行政の指導性を指摘したいと思うのである。「大ベルリン学校田園寮協会」(Arbeitsgemeinschaft der Großberliner Schullandheime)のマッツドルフは、ベルリンの教育行政当局が、学校田園寮滞在にあたって生徒1日1人1マルクの補助を行なったので父兄の負担は1日あたり0.5~1RMに軽減されている、また、貧困児には滞在費免除が実施され、その数は各クラスで4~5名に上るとしている。そして1929年にそうした費用を含め、学校田園寮関係に40万RMが計上されているのである<sup>(44)</sup>。このことは、1924年当時は学校田園寮に対する補助が存在せず、イエンス・ニダールが教育長に就任した1926年から計上され始め、その額が年々増大したことを合わせ考えると、宜なることと得心させられるのである。

そこで、ときにこのベルリン教育長イエンス・ニダールという人間は一体いかなる人物であるのかとの疑問が湧く。彼の人となりについて、近年、ベルリン自由大学のミカエル＝ゼーレン・シュッパンの行なった研究がまことに興味深い。その大要を示せば次のごとくである。

ニダールは12人きょうだいの1人として北シュレスヴィヒの農村に生まれた。10歳で両親はこの子をおある農家に遣った(養子であろう)。この里親が、ニダールの利発なのを見て師範学校に上げた。予科、本科を了えて民衆学校教職に就いたが28歳で校長試験に合格。さらに教員養成所視学官資格をとるためポーゼンの特別コースに学び、



合格している。[この時期ここで後のプロイセン文部省参事官ハンス・リヒャート（Richert, Hans 1869～1940）が教えている。ニダールは恐らくリヒャートの授業を受けていたのであろう]。1913年ベルリン・ノイケルン中間学校教師。戦争で従軍し、敗戦後教職に就き社会主義教員連合設立。1919年ノイケルンの福音派国民学校校長、半年後視学官就任。1921年大ベルリン市庁教育委員、1926年教育長（1933年まで）。この間多様な政治的志向、教育的信条の人々と相対しているが、その意志強く、穏やかで事実即した議論に人々が納得していったのは驚嘆に値する。その例が、レブフーン発案の教員研修機関「ディースターヴェーク大学」を教育行政当局とベルリン教員組合との官民共立で実現したことだ。また、特殊教員養成所や工作教員養成所を設立。さらにクラス定数と必修科目を削減して、過大学級を解消するとともに若手失業教員の雇用も作り出した。生徒たちに無料の演劇鑑賞を始めたのも、文化アクセスの機会を創出したのも彼の力によるところが大きい。教員の研修旅行を促進し、新教育実践の行なわれている多くの地——ウィーン、ハンブルク、シュトゥットガルト、ブレーメンなど——をこの目で見させて、教師が新しい教育への知見を広めるのを援助した。ナチ台頭により公職追放、彼のベルリン教育行政推進は終焉となったのである（後略）…<sup>(45)</sup>

一人の人物によって新教育の創出、推進が可能であるわけではないが、ベルリンの教育行政当局に、新教育への理解と能力、また、識見を備えた人物が果たした役割を欠くことはできない。

まことにベルリン新教育は、このように「新しい教育」に挑戦する人と、情報と、財政と、そしてこれらを支援する親、教師、ベルリン公衆によって集合的な時代の意志として展開された教育・文化運動、また政治運動だったと言えるのである。

## 注

- (1) Hehlmann, Wilhelm: Wörterbuch der Pädagogik. Stuttgart: Kröner, 1971, S. 489.
- (2) ウィッパーマンは、ナチ教育理想は「人種理論」を聖典とし、学校では「健康で《人種的に価値豊かな》肉体形成を目的とする《肉体鍛錬》が中心課題に位置づいていた」と定義づけている。

Wippermann, Wolfgang: „Das Berliner Schulwesen in der NS-Zeit“. In: Schmoldt, Benno (Hrsg.): Schule in Berlin. Berlin: Colloquium, 1989, S. 60.

- (3) 現代のドイツの学校田園寮については、天野正治の研究が具体的で分かり易い。この方面に関するわが国でほとんど唯一の研究と言える。また、その他には辞典項目として伏見猛彌の紹介があり、学校田園寮の歴史的沿革が簡潔に述べられている。

—天野正治「自然の中の教育」、『現代ドイツの教育』、学事出版、1978年所収

—伏見猛彌「学校田園寮」、『教育学辞典』第一巻、岩波書店、1936年所収

なお、天野は „Schullandheim“ を「学校田園宿舍」と訳しているが、伏見は「学校田園寮」である。筆者がこれまで研究して来、また、その後筆者がドイツで間接的に体験して来たところでは、 „Schullandheim“ は「寮」のように思われるので、本論文においては「学校田園寮」の語を充てたいと思う。

- (4) 学校田園寮についての研究ならびに言及は多くはない。ドイツにおいて基本的な資料、ならびに研究としては次のものが挙げられる。

—N. N.: „Schullandheime“. In: Nydahl, Jens (Hrsg.): Das Berliner Schulwesen. Berlin: Wiegand & Grieben Verlag, 1928.

—Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. Illustriertes Handbuch. Kiel: Kunstdruck- und Verlagsbüro Kiel, 1930.

—Scheibe, Wolfgang: „Die Schullandheimbewegung“. In: Scheibe Wolfgang: Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932. Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1969; 6. ergänzte Aufl.

1978.

- －Schmitt, Hanno: „Zur Realität der Schulreform in der Weimarer Republik“. In: Rülcker, Tobias/Jürgen Oelkers (Hrsg.): Politische Reformpädagogik. Bern: Peter Lang, 1998.
- －Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht (Hrsg.): Das Schullandheim. Langensalza: Verlag Julius Beltz, 1926.

- (5) Scheibe, Wolfgang: „Die Schullandheimbewegung“. In: Scheibe: Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932. Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1969; 6. ergänzte Aufl. 1978, S. 291.
- (6) Ebenda.
- (7) 伏見猛彌「学校田園寮」,『教育学辞典』第一巻, 岩波書店, 1936年, 308-309ページ。
- (8) Gebhahard, Julius: Die Schule am Dulsberg. Jena: Verlag bei Eugen Diederichs in Jena, 1927, S. 58.
- (9) Schmitt, Hanno: „Zur Realität der Schulreform in der Weimarer Republik“. In: Rülcker, Tobias/Jürgen Oelkers (Hrsg.): Politische Reformpädagogik. Bern: Peter Lang, 1998, S. 633.
- (10) Scheibe: a. a. O., S. 291.
- (11) この文脈の中で「青年運動」(Jugendbewegung)を考察する必要があるだろうが、今、それに分け入ることは出来ない。青年運動については次の二著を参考にしたことのみに留めておきたい。

－望田幸男・田村栄子『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち』, 有斐閣, 1990年

－田村栄子『若き教養市民層とナチズム』, 名古屋大学出版会, 1996年

- (12) ハイน์リヒ・フォーゲラーのバルケンホフ「労働学校」については次のものを参照。

－Rohde, Ilse: Heinrich Vogeler und die Arbeitsschule Barkenhoff: ein Beitrag zur Historiographie der Reformpädagogik. Frankfurt am Main/Berlin/Bern/New York/Paris/Wien: Peter Lang, 1997. (Dissertation).

なお、このフォーゲラーが試みた革命的労働学校について、カルゼンは、「外社会の組織から分離した小社会というのは自己矛盾だ。なぜなら小社会

にも外社会のしくみが貫かれているわけであり、外社会の経済ならびに精神生活全体から隔絶するということはできないからである」と批判している。

Vgl. Karsen, Fritz: Deutsche Versuchsschulen der Gegenwart und ihre Probleme. Leipzig: Dürr'sche Buchhandlung, 1923, S. 127-128. (カルゼン, 小峰総一郎著訳『現代ドイツの実験学校』, 明治図書, 1986年, 249ページ)。

- (13) 「田園教育舎」会議については次のものを参照。

—Hilker, Franz (Hrsg.): Deutsche Schulversuche. Berlin: C. A. Schwetschke & Sohn Verlagsbuchhandlung, 1924.

—渡邊隆信「田園教育舎のネットワーク形成——《ドイツ自由学校連盟》の創設とその機能——」, 『日本教育学会第58回大会発表用レジュメ』, 1999年

- (14) Vgl. Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. Illustriertes Handbuch. Kiel: Kunstdruck- und Verlagsbüro Kiel, 1930, S. 8-12. より筆者作成。
- (15) Vgl. Nicolai, R.: „Vom Schullanheim in Deutschland“. In: a. a. O., S. 14-15.
- (16) Ebenda, S. 57.
- (17) 田園教育舎の日課は知的教科の学習, 身体・芸術活動, 実際作業, 祝祭などと, 課業の詰め込み状態である。川瀬邦臣「H・リーツの教育改革の思想」(ヘルマン・リーツ, 川瀬邦臣著訳『田園教育舎の理想』, 明治図書, 1985年), 60ページ。なお, このような「絶え間ない鍛錬と訓練」によって強固になった肉体, 勇気, 献身を核とする「ドイツ的性格」の「人格」をカルゼンは批判的に見ている。Vgl. Karsen: a. a. O., S. 64. (『現代ドイツの実験学校』, 168ページ)。
- (18) Der Reichsbund... S. 69-71.
- (19) アディル・コーエンは, 『光の門』(1994)において, 「サマーキャンプ」でコルチャックは, 子どもが一人一人異なった存在であることを尊重し, 貧しい彼らと共にゲームに興じ, 彼らの暗い生活に明るい陽の光を差し入れるために心を砕いたと述べている。Vgl. Cohen, Adir: The Gate of Light: Janusz Korczak, the educator and writer who overcame the Holocaust. London/Toronto: Associated University Presses, 1994, 260pp.
- (20) Der Reichsbund..., S. 326.
- (21) Ebenda, S. 337-339.

- (22) Ebenda, S. 329-331.
- (23) Ebenda, S. 383.
- (24) Hehlmann: a. a. O., S. 489.
- (25) Vgl. Matzdorff, C.: „Arbeitsgemeinschaft der Großberliner Schullandheime“. In: Der Reichsbund..., S. 39.
- (26) Nydahl, Jens: „Grundsätzliches zur Entwicklung der Berliner Schullandheime“. In: Der Reichsbund..., S. 30.
- (27) N. N.: „Schullandheime“. In: Nydahl, Jens (Hrsg.): Das Berliner Schulwesen. Berlin: Wiegand & Grieben Verlag, 1928, S. 340.
- (28) „ÜBERSICHTSKARTE DER DEM REICHSBUND D. DT. SCH. ANGESCHLOSSENEN SCHULLANDHEIME JAN. 1930“. In: Der Reichsbund..., S. 16ff.
- (29) Der Reichsbund..., S. 48-49.
- (30) Ebenda, S. 52-53.
- (31) Ebenda, S. 45.
- (32) シャルフェンベルク島学校農園については、小峰総一郎「シャルフェンベルク島学校農園について」、『中京大学教養論叢』第38巻第3号、1998年1月、参照。
- (33) Nydahl: „Grundsätzliches...“, S. 30.
- (34) N. N.: „Schullandheime“, S. 341.
- (35) Delius, Hellumut: „Berliner Städtische Schullandheime“. In: Der Reichsbund..., S. 31-32.
- (36) N. N.: „Schullandheime“, S. 341.
- (37) Delius: a. a. O., S. 31-33.
- (38) Radde, Gerd: Fritz Karsen. Ein Berliner Schulreformer der Weimarer Zeit. Berlin: Colloquium Verlag, 1973, S. 273.
- (39) Vgl. N. N.: „Schullandheime“, S. 343.
- (40) Ebenda, S. 343-344.
- (41) Delius: a. a. O., S. 35.
- (42) Ebenda, S. 36.
- (43) Vg. Ebenda, S. 36; N. N.: „Schullandheime“, S. 346.
- (44) Matzdorff: a. a. O., S. 39.
- (45) Schuppan, Michael-Sören: „Jens Nydahl 1883-1967“. In: Radde, Gerd/Werner Korthaase/Rudolf Rogler/Udo Gößwald (Hrsg.): Schulreform – Kontinuität und Brüche. Das Versuchsfeld Berlin-Neukölln Bd. II. 1945-1972. Opladen: Leske+Burdrich, 1993, S. 225ff.

なお、ニダールは第二次世界大戦後、ドイツ占領ソ連軍の推薦でテンペルホフ区長（「西ベルリン」）になっているのだが、彼は本来、ベルリン市の教育行政に戻るべき人であった。しかし、彼が社会主義統一党（SED）入党を断ったこと——ニダールはかつて 1920 年代に自分の娘が共産党に入党したらしいこと（恐らく）を知って、彼女を窘めたことが忘れられなかった——、そして、彼の息子がソ連で戦争捕虜になったことが障害になって、ソ連軍政部は、ニダールのベルリン市教育長復職を認めなかったのである。Vgl. Schuppan: Ebenda.

（写真出所）：

ヘルムスドルフのペスタロッチ学校田園寮の厨房図は

—Nydahl, Jens (Hrsg.): Das Berliner Schulwesen.  
Berlin: Wiegand Verlag, 1928.

より。

他はすべて

—Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e.V.  
Illustriertes Handbuch. Kiel:  
Kunstdruck- und Verlagsbüro Kiel, 1930.

からである。